

ベルリン 1 日目-1

ベルリンで立花隆を迎える

2010 年 8 月 29 日、私はベルリン中央駅にいた。
ここは前年できたばかりのピカピカの駅。



saita(c)

1989 年に東西の壁が崩壊し、20 年以上たった。
いまやベルリンは、名実ともにドイツ連邦共和国の首都である。
しかし、その威厳にふさわしいターミナル駅は、2009 年まで存在しなかった。

分裂していたときは、長距離列車がとまる駅も東と西で分かれていた。
西側は、ツォーロジッシャーガルテン、通称ツォー (Zoologischer Garten)
東側はベルリン東駅 (Berlin Ostbahnhof)、
いまでは、そんな時代があったことを忘れさせるぐらい、
ひっきりなしに S-bahn (近郊鉄道) が 2 つの駅の間を行き来している。
だが、どちらの駅も、ドイツ国内・欧州内からやってくる長距離列車が止まるにはあまりにも小さい。ベルリンは首都にふさわしい、東でも西でもない大きな駅を統一してからずっと必要としていた。
それが 2009 年にできたのだ。統一して 20 年たってようやく。

そして私は、東西統一がやっと形をともなってきたのをまさに体現しているような
ベルリン中央駅の地下ホームの 7 番線で、ドレスデンから到着する列車を待っていた。

そこには立花隆先生が乗っているはずである。
立教学部生ゼミ「こねこ」の齋田君とともに数日前にプラハに入り、
ドレスデンを経由してベルリンに到着するのである。

前日にボンでの調査をおえてベルリンに入った私は、幸運にもベルリンフィルのシーズン
幕開けコンサートに足を運ぶことができた。

頭の中では、サイモン・ラトルの指揮する姿と、マーラーの第1番がまだ鳴り響いている。
それも先生を迎える気分を盛り上げていたのかもしれない。

電車は予定より少し遅れて入ってきた。先生が降りる車両の位置でまっていたので、2人は
すぐに私に気付いたようだ。齋田君が私をみつけて、先生に「みてください」という感じで
私に向けて外を指さしている。先生は、立教大学でお会いするときと同じように、キャリー
ケースをゴロゴロとひきずって列車から現れた。

ニコニコされているその様子から、これまで回ってきた2都市ではかなり満足されたこと
が伺える。



プラハ市街地を臨む立花先生



ドレスデンでの先生

ともに Saita(c)

ベルリンの旅を満喫されるかは、きっと私次第……

以前、3か月ほどインターンで南部のシュエネベルクに住んでいた私は、ベルリンはどこでも案内できる自信がある。

だが、少しプレッシャーがあった。

言い訳をすれば、先生からどこを回りたいかを事前に聞いていないのだ。

日本で一度伺ったが、まだ具体的にはなかったらしく、結局わからずじまいだった。

けれども、これからアウシュビッツに行くのだから、きっとナチスや、ユダヤ人迫害など、戦争の爪痕は必須。

そう考えて、案内できそうな場所は、昨日ベルリンフィルに行く前にチェックしてある。

さあ、立花先生は、どこに行きたがるのだろうか。

そして私は、ベルリンで、先生に何をお見せできるのだろうか。



ベルリン中央駅にて saita(c)